

## キリスト教学の現場から (2)

—「種を蒔く人」のたとえ (マタイ13:1-9) を読む—

梶原忠裕  
塩野和夫

### はじめに

西南学院大学でキリスト教学を教える中で、「受講生の声」から、さまざまな気づきの機会を与えられてきた<sup>1)</sup>。聖書は読みにくく、解釈が難しいというのが、受講生の定評となっている。現代日本とは全く違う時代・風土・文化・社会状況の言語で書かれた聖書の翻訳は、一つ一つの言葉の意味についてさらに膨大な注釈を必要とする。

福音書が語る「天の国」とは何を意味しているのか。「天の国」に対する受講生のイメージについて考察するとともに、「種を蒔く人」のたとえ (マタイ13:1-9) を読み直す。

塩野和夫教授 (西南学院大学国際文化学部) には、授業の進め方や論文執筆について指導いただいた。

### 1. 「種を蒔く人」のたとえ (マタイ13:1-9) を読む

「種を蒔く人」のたとえについて、2018年度キリスト教学Iの第8回授業で以下のように解説した。その際に、ジャン=フランソワ・ミレー画「種まく

---

1) 梶原忠裕・塩野和夫「キリスト教学の現場から (1) 受講生の声を聞く」29-46頁

人」および日本聖書協会発行『みんなの聖書絵本シリーズ30神さまの国』を用いて、種蒔きの風景をイメージできるようにした。

さらに、授業感想文に盛り込むテーマを指示した。なお、全てのテーマについて答える必要はないこと、および正解を求めているわけではないことを伝えてある。

イエスの活動内容を要約すると、ガリラヤ地方の「町や村を残らず回って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、ありとあらゆる病気や患いをいやされた」（マタイ9：35）、つまり福音宣教と病気の人への癒しを行っていたようである。特に福音宣教活動の中心的主題は「天の国（神の国）」であろう。イエス自身、天の国（神の国）の良い知らせをもって公的活動を開始している。

「悔い改めよ。天の国は近づいた」（マタイ4：17）

「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」

（マルコ1：15）

マタイによる福音書では「天の国」と呼び、他の福音書では「神の国」と呼んでいるが、その内容は同じである。

テーマ①「天の国（神の国）」とは何か（どのようなイメージか）？

「たとえ」とは何かを暗示している話である。福音書にはイエスの語った多くのたとえが掲載されているが、それが何について語っているのか明示されることは少ない。「種を蒔く人」のたとえは、後で説明（マタイ13：18-23）が付されている珍しい例である。その説明では、「種」とは「御国の言葉（御言葉）」を意味している。

テーマ②「御国の言葉」とは何か（どのようなイメージか）？

「種（御国の言葉）」は、条件の悪い土地に蒔かれると実を結ぶことはできないが、良い土地に蒔かれると百倍もの実を結ぶ。このたとえの説明

では「道端に蒔かれたもの」「石だらけの所に蒔かれたもの」「茨の中に蒔かれたもの」「良い土地に蒔かれたもの」についてそれぞれに対応する意味が与えられており、いわゆる寓話的説明となっている。ところがこの寓話的説明でも説明されていないことがある。

テーマ③「種（御国の言葉）の実り」とは何か（どのようなイメージか）？

## 2. 「みんなの意見まとめ」実例

前述の3つのテーマに対する受講生のイメージを、「みんなの意見まとめ」プリントから紹介する。テーマ①に対するコメントについては、多少強引ながら、講師の独断で「死後の世界・神秘的な世界」「来たるべき理想の世界」「心の中にある精神的な世界」「その他」の4つのイメージにまとめさせてもらった（◎は似た内容が受講生の10%を超えたコメント）。

### テーマ① 天の国（神の国）とは

#### **[死後の世界・神秘的な世界]**

- ◎生前善い行いをした人だけが死後に行くことができる「天国」または「極楽浄土」。苦しみがなく幸せで平和な楽園で安らかに過ごすことができる。罪人は絶対に入ることができない領域。
- 悪いことをした人には天罰を与えられる。
- 子供のように純粋に神を信じ、イエスの教えに従う人が亡くなった後に住むところ。
- 実は、幸福を手に入れたいという欲望に満ちた者が落とし入れられる場所。幸せ過ぎると、逆に苦しいという感情が芽生えるのではないかと思う。
- 「天の国」など存在しない。死んでしまったら無になる。
- ◎万能の神が治める神聖・荘厳で神秘的な場所。空高い雲の上から地上の世界を見守って、人々を良い方向に導いてくれる。羽のある天使たちがたくさんいて、優しさで包まれた明るい世界。ゆったりとした時間の中で、光が絶え

ず、静かな音楽が流れ、お花畑が広がっているイメージ。

### 〔来るべき理想的な世界〕

- 仕事や苦難から解放され、自由を謳歌できる場所。
- ◎病気や貧困などがなく、偏見や差別もなく、みんなが平等で幸せに暮らせる理想の社会。
- 神やキリストの言葉を素直に信じて生きる人々が不自由なく暮らせる国。
  - みんなが罪を赦され、救われる世界。
  - 穏やかで争いがなく平和な世界。

### 〔心の中にある精神的な世界〕

- 自分が考えて選び取った心の国。
- 自分の欲を考えず、純粹に神様を信じる人の信仰心。
- 人々は辛く苦しい日々の中で、願ったり祈ったりすることで生きる希望を見つけていたと思う。その人々の思いが叶う場所。
- 困難に打ち勝つ活力。
- 神から受ける愛。
- 自分と隣人との関係。周りの人に思いやりをもって行動し、教えをしっかりと守る人のいる国。

### 〔その他〕

- キリスト教を信仰している国。
- かつてアダムとイブが神と共にいた楽園。「天の国が近づいた」とは、神と人間が再び共に暮らす世が近づいたということだと感じた。
- 「天の国」といいながら、実際は貧困に苦しんでいる国（夢の島といいながら、実際はごみの埋立地のようなもの）。

## テーマ② 御国の言葉とは

- ◎神の言葉, お告げ。人間を正しい方向に導く神の教え。幸せに生きるための神からの助言。
- ◎イエスの言葉, 教え。聖書の記述。
- ◎ありがたい御言葉, 教訓。
  - 人々の心を救ってくれる優しい言葉。穏やかになる言葉。真理。
  - 日常生活でありふれた言葉だが, その中にはとても役に立つものもある。
- ◎神の恵みが得られ幸せになる言葉。信じて行動すれば, 良い結果が生まれる。幸福を手に入れるための手掛かり。

## テーマ③ 種(御国の言葉)の実りとは

- ◎神の言葉を信じて従うと良いことが起きる。夢や願いが実現する。人生が豊かになる。
- ◎御国の言葉によって, 人々の罪が赦され, 救済されること。
- ◎神やイエスの言葉, 教えが広まること。回心して信仰する人が増えること。
  - 皆が平和に暮らせる幸せな世の中になること。

### 3. 「種を蒔く人」のたとえを読み直す

授業感想文は自由記述であるが, 盛り込むテーマを指示しておいたことで意見の集約がしやすくなった。特にテーマ①に対するコメントを4つのイメージにまとめた結果, 福音書の「天の国(神の国)」に対して受講生が何を思い浮かべているのか, 傾向がはっきりした(図1)。

#### (1) 天の国(神の国)について

福音書で語られる天の国(神の国)の「国」とは, ギリシア語の「バシレイア」の訳語であるが, もともとは「統治」「支配」といった意味の言葉である。従って神の国とは「神による統治・支配」ということである。山浦玄嗣

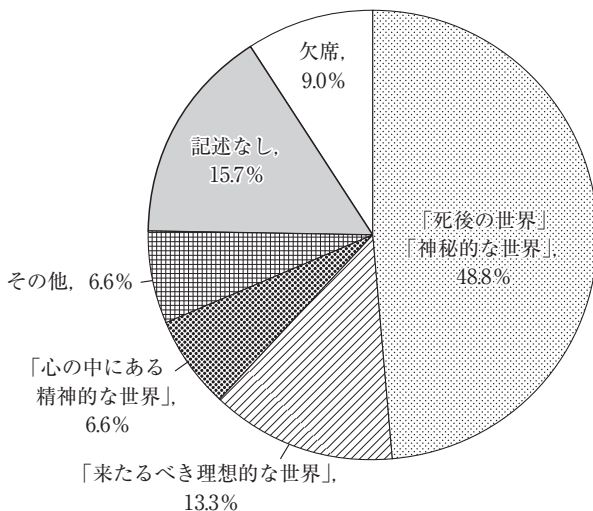


図1 「天の国（神の国）」についてのイメージ

2018年度キリスト教学I受講生の第8回授業感想文（3クラス166名分）をもとに作成した。実際には1人が複数のイメージを書いたコメントもあったが、1人につき1イメージになるように取捨選択した。

（2011）はバシレイアを「（神さまの）お取り仕切り」と訳している<sup>2)</sup>。

神による「支配」というと、現代の民主主義社会に生きる私たちは独裁者的な悪のイメージを抱きやすい。しかし、福音書が著された当時の地中海世界は、まさしくローマ皇帝という独裁者による「支配」の下にあった。ローマ皇帝の意に従わなければ生命の危険にさらされていた時代であった。そのような世界にあって福音書は、ローマ皇帝による統治・支配ではなく、天地万物を創造した神による統治・支配を語ったのである。したがって「神による統治・支配」とは、人間（ローマ皇帝）が人間を抑圧することのない状態である。

そのことを念頭に置いた上で、受講生の「天の国（神の国）」イメージについて検討した。

2) 山浦玄嗣『イエスの言葉ケセン語訳』20-25頁

受講生の大半は「天の国（神の国）」と聞いて、「死後の世界」や「神秘的な世界」を思い浮かべる（図1）。これは受講生に限らず、日本社会の中で広く共有されている「天国・極楽」イメージである。現世が「人間（ローマ皇帝）の支配する世界」であるならば、彼岸こそが「神の支配する世界」であろう。そうすると、イエスの「悔い改めよ。天の国は近づいた」（マタイ4：17）という宣言は、「死期が迫っているから、悔い改めよ」ということになるのであるだろうか。

イエスの宣言は、「天の国は近づいた」であって「天の国に近づいた」ではない。天の国の方から私たちのところへやって来るイメージで語られている。私たちが彼岸の世界へ向かうイメージではない。バシレイアとは「(神による)統治・支配」そのものであって、「(神の支配する)国・領域」とはニュアンスが違っている。

ただし、ローマ帝国におけるキリスト教徒迫害の時期（2世紀）に、迫害を耐え忍ぶ上で心の支えになったのは、殉教したキリスト教徒（の魂）は天に登る（＝神のもとへ行く）という信仰であったことも、記録に残されている事実である<sup>3)</sup>。このような殉教者の信仰は、必ずしも福音書が語る「天の国（神の国）」と同一視できないが、現代のキリスト教会でも「天の国（神の国）」が、死後の世界・神秘的な世界としての「天国」イメージとオーバーラップして語られることはある。

「天の国（神の国）」を「来たるべき理想的な世界」としてイメージするとき、神を信じていれば、苦難から解放され、争いや差別のない平和で平等な理想郷のような社会になるのであろうか。

歴史は少しずつ「来たるべき理想の世界」に近づきつつあるように見える。古代社会では当たり前であった奴隷制は、現代社会ではほとんど姿を消しつつある。しかし、古代から現代に至る歴史は決して順調な道を辿ってきたわけで

---

3) 弓削達『ローマ皇帝礼拝とキリスト教徒迫害』189-196頁

はない。

アメリカ合衆国で A. リンカーン大統領が黒人奴隷の解放を宣言したのは 1862 年である。しかしアメリカ南部では「人種分離法（ジム・クロー法）」によって、公共施設や交通機関などでの人種隔離，教育や投票や住宅などの不平等といった人種差別政策が続いた。1955 年にローザ・パークス夫人（黒人）が公営バスで白人乗客に席を譲らなかったために逮捕されたのをきっかけに，M. L. キング Jr. 牧師に代表される公民権運動が広がり始め，ついに人種分離法が撤廃されたのは 1964 年である。奴隷解放が宣言されてもなお，人種差別を是とする社会が約 100 年間もの長きにわたって続いたのだ。「来たるべき理想の世界」として「天の国（神の国）」を考える時に，アメリカの公民権運動に見られるような粘り強い（非暴力的）抵抗・抗議運動とともに，多くの犠牲が伴ったことも忘れるべきではない。そして自身も凶弾に倒れた M. L. キング Jr. 牧師の「もし肉体の死が，だれかが自分の子供たちを永遠の心理的な死の人生から解放するために支払わなければならない値だとするならば，これ以上にキリスト教的なことはないのだ。」<sup>4)</sup>という言葉も確認しておく必要があるだろう。

「天の国（神の国）」が「心の中にある精神的な世界」であるという場合，「生きる希望」，「困難に打ち勝つ活力」，「神から受ける愛」など，抽象的ではあるが，ほとんどポジティブなイメージになっている。そして，それは単に心の中だけに納まるものではなく，自分の行動や隣人との関係という形で外にあふれだすイメージでもある。

「神の国は，見える形では来ない。『ここにある』『あそこにある』と言えるものでもない。実に，神の国はあなたがたの間にあるのだ。」（ルカ 17：20-21）というイエスの言葉からも，神による統治・支配は土地や民族によって限定されるものではないことがわかる。

問題は，そのポジティブさの方向である。神による統治・支配はすでに「あ

---

4) C. カーソン・K. シェパード（編）『私には夢がある M・L・キング説教・講演集』70 頁



なたがたの間にある」。イエスは、虐げられ苦難の中にある人々と痛みを共有して「憐れに思う（スプラクニゾマイ）」ところから、福音宣教といやしのわざを始めている。そこに「天の国（神の国）」が実現しているのである。

「天の国（神の国）」のその他のイメージとして「かつてアダムとイブが神と共にいた楽園」が複数人からあげられていたのも興味深い。かつて人間は、楽園で「神による統治・支配」の下で生活していたが、墮罪のために神との共生関係は断たれてしまった。イエスの「天の国は近づいた」という宣言は、「神と人間が再び共に暮らす世が近づいた」ことを意味するという感覚は正鵠を得ていると思う。そして、この感覚とともに、上述の3つの「天の国（神の国）」イメージに重なり合う部分があることに気付く。

現代の日本社会において「神は我々と共におられる」（マタイ1:23）という感覚は希薄である。それゆえ、現世と切り離す形で、神がおられる天上の「神秘的な世界」を彼岸に想定してしまいがちである。かつてアダムとイブが神と共にいた楽園は確かに「神話」であろう。しかし「神話」だから意味がないのではない。楽園喪失の物語（創世記3章）は、かつて人間は「神と共にいた」が、人間の側から神を遠ざけてしまったことを語っている。

「来たるべき理想の社会」とは、その意味で再び「神が共におられる楽園」への回帰とも言える。それは「見える形では来ない」が、すでに私たちの「心の中に」種は蒔かれている。神がおられる「神秘的な世界」は彼岸にあるのではなく、実に「あなたがた（私たち）の間にある」。

本来ならばここで新約聖書全体に通底している終末論的なイメージが加わるべきであろうが、受講生のコメントの中にそこに通ずるイメージを見つけられなかったので、ここでは説明に加えなかった（終末論については後日触れる予定にしていた）。

## (2) 御国の言葉とその実りについて

「御国の言葉」と聞いて受講生が思い浮かべるイメージの多くは「ありがたい言葉・お告げ・教訓」である。「御国（＝天の国、神の国）」が「死後の世界・神秘的な世界」であるならば、その「お言葉」は当然ありがたいものであり、それに聞き従えば良いことがある（幸福になる）という「実り」になるのであろう。

一見すると純朴な宗教信仰ではあるが、ある意味では御利益信仰的な発想になりかねない。さらに聞き従わなければ悪いことがある（不幸になる）という因果応報的発想から律法主義的行為義認にもつながりかねない。このような因果応報的発想は、受講生が（キリスト教を含め）宗教一般について潜在的に抱いているイメージである。そのような世界観を語る宗教・教会もあるが、現代社会において、あまりに単純な御利益信仰的もしくは因果応報的な言説は、宗教一般を貶める元凶にしかならないのではないか。

「御国の言葉」（マタイ13：19）を、本田哲郎（2001）は「神の国を告げることができごと」と訳している。「言葉」と訳されてきたギリシア語ホ・ロゴスが、「できごと、歴史の中に引き起こされた事件、または、それらを通して語られるメッセージ」を指すヘブライ語ダバールを意味しているからである（さらに本田（2001）の議論は「受肉によって『ことば』となった」（ヨハネ1：14参照）イエスへと向かうが、授業ではそこまで踏み込まなかった<sup>5)</sup>。

現在の大学生である受講生にも伝わりやすいと思われる身近なダバールの一例として、塩野和夫（2015）から「押し出した言葉」<sup>6)</sup>を授業で紹介した。

将来、本当に牧師となる覚悟があるのか迷っていた時の春休み、アルバイトの建築現場で一緒に働く「おっちゃん」から大学卒業後どうするのか聞かれ、「いろいろな人を見ていると、その人たちが救われて人間らしく生きることができるように、そのための勉強をもっとしたいと思ってい

---

5) 本田哲郎（訳）『小さくされた人々のための福音』21-23頁

6) 塩野和夫『キリスト教教育と私中篇』77-81頁

る」と答えた。すると間髪入れず「おっちゃん」は、「僕らのためにもがんばってえな！応援してるで!!」と言ったのである。この「おっちゃん」の期待を込めた言葉に、ジレンマを乗り越えてキリスト教神学へ向かう後押しをするものすごい力を感じたのであった。

ここに「御国の言葉（神の国を告げるできごと）」の一端が見られるように思う。「天の国（神の国）」実現のための行動に希望を与え、背中を押してくれる言葉には力がある。「御国の言葉（神の国を告げるできごと）」は、常にさまざまな場面で見つけることができるだろう。

### (3) 「種を蒔く人」のたとえは何を語っているのか

「種を蒔く人」のたとえの説明（マタイ13：18-23）を普通に読めば、このたとえは因果応報的な寓話と捉えられやすい。この説明部分がイエスに由来するのではなく、「初期教会（マルコ以前の段階）の解釈に由来することは、ほぼ定説化している」<sup>7)</sup>。しかしイエスに由来しないと推測されているからといって説明部分を切り捨ててしまうのではなく、むしろ初期教会の解釈を手掛かりにして「種を蒔く人」のたとえを読み直してみたい。

マタイによる福音書13章には「天の国」についてのたとえがまとめられている。「天の国は次のようにたとえられる」（マタイ13：24）という言葉は、「天の国がどのような場所なのか」「神はどのような統治・支配をするのか」を説明している印象を受けやすい。「神はどのような統治・支配をするのか」と考えながら「種を蒔く人」のたとえを読むと、因果応報的解釈にとらわれてしまう。

しかし、「種を蒔く人」のたとえをはじめとして、マタイによる福音書13章にまとめられている「天の国」についてのたとえは、神がどのような統治・支配をするのかを説明しているのではない。神による統治・支配がどのような形

---

7) 橋本滋男「マタイによる福音書」95頁

で広がっていくのかを説明しているのである。「御国の言葉」の実りは、御利益でも因果応報でもない。

たとえの中で種を蒔いているのはそもそも誰であろうか。種が「御国の言葉」をたどっているのであれば、種を蒔いているのは「神」と解釈するのが一般的であろう。

種は神によって常に蒔かれている。しかし1粒1粒の種は小さく、私たちは常にその種を受け入れられる状態にあるとは限らない。種を鳥に奪われる時もあるだろうし、種が根づかなかったり成長できなかつたりする状態の時もあるだろう。それでも種は神によって常に蒔かれている。

そしてある時、私たちが「良い土地」の状態の時、1粒の種が100倍もの実を結ぶ。それは100倍もの新しい種である。新しい種はまた新しい土地に蒔かれる。こうして「御国の言葉（神の国を告げるできごと）」はどんどん広がっていくことになる。

「種を蒔く人」のたとえは、神による統治・支配がどのような形で広がっていくのかを具体的なイメージで語っているのである。

では、神はどのような統治・支配をするというのだろうか。そのことを「種を蒔く人」のたとえは説明していない。おそらくそれは、ローマ皇帝の抑圧的支配の下にいた当時の福音書読者にとって、ある程度自明のことであったのではないだろうか。人間（ローマ皇帝）が人間を抑圧しない状態、それが当時の福音書読者にとって「天の国」であったように思われる。そこにはイエス当時の民衆が期待したローマ帝国支配の転覆を伴う終末論的なイメージがつきまっていたであろう。

しかし、イエス自身が語る「天の国」は必ずしもそのような大袈裟なイメージと限らない。「実に、神の国はあなたがたの間にある」（ルカ17：21）。神による統治・支配の出来事（人が人を抑圧しない状態）は、隣人同士のささやかな関係の中にも見出され得る。

## おわりに ― キリスト教学の意義

受講生の声を聞きながら講義を組み立てていく中で、「種を蒔く人」のたとえの読み直しを迫られてきた。そこで考えさせられてきたのは、予備知識のない状態で聖書を読もうとすると、著者の意図や当時の読者の感覚とはかなりかけ離れたイメージでとらえかねないということである。実際、受講生の多くは「種を蒔く人」のたとえを御利益信仰的・因果応報的なイメージでとらえる傾向が強かった。そこには宗教一般に対する現代日本的な感覚が反映されている。

聖書もまた書籍として出版されて一般書店の店頭に並べられている以上、解釈を現代の読者に委ねざるを得ない。それでも機会あるごとに、聖書が現代の日本とは大きく違った状況の中で書かれたことを伝え、聖書を読むための予備知識が提供される必要がある。それを踏まえた上で、聖書のメッセージが現代日本に生きる私達にどのような意味があるのかを考えていきたい。

「種を蒔く人」のたとえは、「天の国（神による支配・統治）」がどのような形で広がっていくのかを語っている。その意味で、西南学院大学の「キリスト教学」が多くの先生方によって開講されていることは大変重要なことだと思われる。また、チャペルで多様な経歴の講師から講話を聴くことができるのは大変重要なことだと思われる。多彩なアプローチで紹介される「御国の言葉（神の国を告げるできごと）」が受講生の今後の活躍の後押しとなり、さらに多くの実り（神の国を告げるできごと）をもたらすことを祈念している。

## 参考文献

- 『NEW TESTAMENT 新約聖書（NKJ/新共同訳）』日本国際ギデオン協会，1999年  
『バイブル・プラスカラー資料』日本聖書協会，2014年  
C.カーソン・K.シェパード（編），梶原寿（監訳）『私には夢がある M・L・キング説教・講演集』新教出版社，2003年  
梶原忠裕・塩野和夫「キリスト教学の現場から（1）受講生の声を聞く」『西南学院大学国際文化論集』第34巻第1号29-46頁，2019年  
塩野和夫『キリスト教教育と私 中篇』教文館，2015年

- 杉本幸子（絵）『みんなの聖書絵本シリーズ 30 神さまの国』日本聖書協会，2010 年
- 橋本滋男「マタイによる福音書」川島貞雄ほか（編）『新共同訳新約聖書注解 I』（日本基督教団出版局）29-165 頁，1991 年
- 本田哲郎（訳）『小さくされた人々のための福音』新世社，2001 年
- 山浦玄嗣『イエスの言葉ケセン語訳』文藝春秋（文春新書），2011 年
- 弓削達『ローマ皇帝礼拝とキリスト教徒迫害』日本基督教団出版局，1984 年